消滅の危機にある言語の再生に向けて
――アルゲロのカタルーニャ語――

ジュアン・アルマンゲ・イ・エレロ

竹中克行*／笹野益生** 訳

日本語、あるいは大多数の言語とは異なり、カタルーニャ語は均質性を特徴とする言語である。しかし、だからといってカタルーニャ語に方言差がないわけではない。むしろ研究者は、カタルーニャ語を明白に異なる2つの方言（東方カタルーニャ語と西方カタルーニャ語）に分けた上で、各方言の内部に固有の特徴を備えたいくつかの変異体を類別し、さらに夥しい数の下位方言へと区分することが多い。このことは、バレアレス諸島の状況を考えればよくわかる。そこでは、島ごとに固有の方言といくつかの下位方言がみられ、マリョルカ島民ならだれでも、出会った人の発音の特徴から島のどの地区の出身であるか、見当をつけることができる。

しかしながら、カタルーニャ語の方言差を構造的な観点からみると、カタルーニャ語はスペイン語の場合に近く、イタリア語の場合とは峻別される。わかりやすい例をあげてみよう。カスティーリャ語（スペイン語）話者のあるスペイン人、あるいはアンダルシア人やカナリア諸島、赤道ギニアの市民がメキシコ人、ペルー人、チリ人といった人々と会話するのにまったく支障はない。当然のことながら、発音の特徴やある種の、とりわけローカルな話題における言葉の使い回しから、話し相手の出身の国や地方は明らかになろう。しかし、われわれにとって興味深いのは、たとえ学校教育を受けていない者どうしでも即座に理解することができ、自らの方言の話し方を変えなくても同様に理解が成り立つために、共通の「標準語」が使用されないということである。これは、日本語の場合には当てはまらないのではないか。日本語は、方言の構造の面でおそらくイタリア語の場合に

* 愛知県立大学外国語学部

** 愛知県立大学学術情報センター

より近い。すなわち、多くの方言が存在することが言語の一体性を脅かすことはないが、意志疎通を可能にするには「標準語」に頼ることが必要である。

たとえば、カラブリアの人とヴェネツィアの人は、それぞれの方言を用いたのでは意思疎通できないであろう（文献学者はいずれの方言もイタリア語とみなしているが)。このため、異なる地方の間のコミュニケーション、あるいは高次の、ないしフォーマルなコミュニケーション場面では「標準語」が不可欠となる。方言は、家族内のインフォーマルないし伝統的なコミュニケーション場面に追いやられ、そのもろい威信を失い、話者をみじめな立場に貶める。それら方言の話し手は、状況に巻かれて自信を失い、「標準語」という変異体を威信に満ちた、学校やフォーマルなコミュニケーションで必要な言語、また就業にさいして、中層・上層の職業で出世するために必要な言語と考えるだろう。

以上はイタリア語について述べたものであり、これがどこまで日本語に通じるのかはわからない。しかし、繰り返しになるが、カタルーニャ語には当てはまらない。むしろ、カタルーニャ語の「標準語」は、テレビのような大勢を相手とする言語使用、またとりわけ書き言葉として有用である。そうした場面でこそカタルーニャ語の一体性が明らかになるからである。しかし、コミュニケーション場面が高次・低次、フォーマル・インフォーマルのいずれであれ、カタルーニャ語話者はみなローカルな変異体を使用するだろうし、それによって理解に大きな支障が生じることはない。というのも、実際のところ主要な相異は、発音の特徴、微小な形態的変異、同義語とみなしうる地方固有の語彙に関するものだからである。

要するに、カタルーニャ語話者が「標準語」を日常生活で積極的に使用することはない。方言の細分化は一種の豊かさを表し、言語の一体性にとっての脅威とはみなされていない。異なる方言間でも自然に理解が成り立つのである。

しかし、この講演の本題に入る前に、カタルーニャ語とは厳密に何なのかをもう少し丁寧にみておこう。よく知られているように、カタルーニャ語は独立したロマンス語のひとつであり、文献学的にいえば、イベロ・ロマンス語（ポルトガル語、スペイン語のほか、アラゴン語のように、すでに消滅してしまったか、消滅の過程にあるいくつかの言語が含まれる）と

ガロ・ロマンス語（プロヴァンス語ないしオック語、フランス語など）という2種類の言語グループを橋渡しする役割を果している。橋渡し言語（もっともその定義はきわめて恣意的であるが）としての性格上、カタルーニャ語は、両グループに特有の構造的特徴を併せもつが、文献学では国際的にカタルーニャ語に対して完全に独立した地位を与えている。カタルーニャ語が19世紀までプロヴァンス語と同一視され（これは両者の高い類似性によるものであり、とくに中世においてはそうであった）、フランコ体制期に侮辱的にスペイン語の方言とみなされたにもかかわらずである。このスペイン語の方言という定義は、けっして科学的に用いられたのではなく、もっぱら蔑みの意図をもって使われたものである。カタルーニャ人たちの自尊心を切り崩したいという願望がそこにはあった。しかし、この侮辱の政策は、意図されたのとは反対の効果をもたらした。なぜならば、のちにみるように、カタルーニャ人はカタルーニャ語に自らのアイデンティティを感じるのであり、周知のとおり、抑圧は反抗心を増幅させるものでしかないからである。そして現実はそのとおりになった。

カタルーニャ語は、すでに諸言語のラテン語からの分化が十分に進んでいた9世紀頃に、ヒスパニア辺境領、すなわちイスラム教徒に対する防衛上の理由から、フランク人が現在のカタルーニャ自治州北部に相当するイベリア半島北東部に領有した安全地帯で誕生した。のちにカタルーニャの諸伯がフランク王から政治的に自立したことで、南方への領土再征服とカタルーニャ語地域の拡大に弾みがついた。こうして、カタルーニャ語はカタルーニャ南部へと広がり、13世紀にはバレンシアやバレアレス諸島に達した。現在では1千万人がカタルーニャ語を話し、行政地域ではなくカタルーニャ語が使われている地域でみると、ヨーロッパの4か国にまたがる。スペインでは、3つの自治州（カタルーニャ、バレンシア、バレアレス諸島）で使用されており、カスティーリャ語すなわちスペイン語とともに自治州の公用語になっている。また、アラゴン自治州のカタルーニャに接する狭い帯状の地域でも使用されている。ピレネー山脈では、カタルーニャ語は独立国家アンドラ公国の唯一の公用語であり、フランスでは、南東部の諸県、すなわちペルピニャンを中心都市とするルシヨンにカタルーニャ語話者がいる。そして最後に、カタルーニャ語はアルゲロでも話されている。地理的にはサルデーニャに、政治的にはイタリアに属するこの都市では、カタルーニャ語は市レベルでの公用語のひとつとされている。

カタルーニャ語がアンドラ公国の公用語であるために国際連合の言語のひとつに数えられ、また、スペインのいくつかの自治州の公用語であるがゆえにEUで法的に使用される言語として認められていることは特筆に値する。実際、カタルーニャ語が特異な立場におかれていることは間違いない。国家をもたない言語、カタルーニャ語は、広く認知され、政治的に受け入れられ、多くの使用人口を有する（たとえば、カタルーニャ語話者はデンマーク語のそれよりも多い)言語である。にもかかわらずカタルーニャ語は、国家語が有するような権利のすべてを享受してはいない。たとえば、裁判官はカタルーニャ語を話すことも理解することも義務づけられていない。このため、カタルーニャにおける二言語使用は権利であり、義務であるにもかかわらず、それに向かう過程はきわめて緩慢なものになっている。しかし、それはたんなる象徴的な例にすぎない。確かなのは、EUの外からの人口流入（南米出身者、したがってカスティーリャ語話者が多い）が、カタルーニャにおけるカタルーニャ語の未来にとって真の脅威だということである。

13世紀、カタルーニャがイベリア半島における拡張を終え、フランス南部での拡張が不可能になると、地中海への進出を考えざるをえなくなった。13世紀末、ローマ教皇は、カタルーニャ公国の君主を兼ねるアラゴン・バレンシア王にサルデーニャ王国を封土として与えた。固有の民族・言語が跋扈し、4つの独立王国（giudicati）に分裂したサルデーニャを征服する、というのが賦与にあたっての条件だった。他方、サルデーニャ島にはピサ人やジェノヴァ人の政治的な力が及んでいたため、カタルーニャ人とサルデーニャの地元領主との同盟や対立といった複雑な駆け引きは、今日でも十分に明らかになっていない。確かなのは、教皇のお墨付きを得たカタルーニャ人によるありふれた征服戦争と思われたもの（また14世紀前半まで現実にそうであった）が、14世紀半ばになって、サルデーニャ＝ジェノヴァによる反カタルーニャ的な叛乱ないし抵抗戦争（いずれであるかは見る者の視点による）と化したということである。アルゲロの町は、1353年にアラゴン王ペドロ4世（カタルーニャの君主としてはペラ3世）に反旗を翻し、その結果、同地のサルデーニャ＝ジェノヴァ人は、入念に練られた植民政策によって追放され、カタルーニャ語話者が大半を占めるアラゴン連合王国の出身者たちに取って代わられた。実際、それ以降中世を通じて、

カタルーニャ語はアルゲロの都市行政の常用語だったばかりでなく、民衆の話し言葉でもあった。この言語の孤島ともいうべき町、その民衆的な場においては、20世紀までカタルーニャ語以外の言語は浸透しなかった。20世紀に入ると、当然予想されるように、イタリア人が義務教育、兵役、テレビ、観光などを通じて、カタルーニャ語を押し分け、イタリア語をもち込んだ。

サルデーニャ島のアルゲロ以外の地域にカタルーニャ語がどのように浸透し、やがて消滅していったのかについて検討することは、ここでのわれわれの関心事ではない。確かなのは、詩、手記、民衆劇、そしてとりわけ行政の言葉であったカタルーニャ語を手放さなかった富裕層が、アルゲロに次々と押し寄せる文化による支配を受け入れたということである。すなわち、1708年に終わるカスティーリャによる支配ののち、1717年まではオーストリアによる支配が続き、1717～1720年のスペインによる再度の支配を経て、最終的に、ピエモンテそしてイタリアによる支配を受けて現在に至っている。とはいえ、アルゲロでは、18世紀まで（当時、サルデーニャ島はすでにピエモンテに服属していた）、行政のかなりの部分がカタルーニャ語で執り行われたこと（19世紀のカタルーニャ語の文書もみられる）、庶民はサルデーニャ語やスペイン語をけっして受け入れなかったこと、そしてさきに述べたように、アルゲロのカタルーニャ語があらゆる社会階層の言語としてイタリア語と共存するようになったのは、最後の段階の出来事にすぎないということは改めて強調しておくべきであろう。

アラゴン連合王国ないしイベリア半島の国家（今日われわれが「スペイン」とよんでいるもの）は、1720年以降、アルゲロとの関係を断ち切った。このため、アルゲロのカタルーニャ語は、島内の他地域と命運を共にすることになった。とはいえ、民族の入れ替えがアルゲロでしか起きなかったという経緯から、島内の他地域では支配者が変わるとカタルーニャ語はただちに行政における主役の地位を失ったが、民族の入れ替えがあったアルゲロではカタルーニャ語が使用されつづけ、少なくとも2世紀の間は他の言語の浸透を許さなかった。それゆえにカタルーニャ語は、サルデーニャ島のアルゲロ以外の地域では消滅していく一方で、アルゲロの庶民階級にとっては唯一の言語でありつづけた。しかも18世紀以降、キリスト教の教義は基本的にカタルーニャ語で伝えられたため、カタルーニャ語で編

集・公刊された公教要理が3編（1789年、1818年、1850年）見出される。

とはいえ、前述の政治的変化を受けて、アルゲロは他のカタルーニャ語地域との関係を完全に断たれ、またカタルーニャあるいはバレンシア、バレアレス諸島でもカタルーニャ語地域としてのアルゲロの存在が忘れ去られた。もちろん、船乗りや挿絵本の製作に携わった芸術家たちは、アルゲロのカタルーニャ性についての認識をもっていた。しかし、そうした現象も主要な文化の担い手の知るところとならなかったために、学術的な意味ではなんら影響を及ぼすことがなかった。

ようやく1864年、スペインに対するカタルーニャの独自性の回復に向かう文化的・政治的状況に浸っていたカタルーニャ人は、まったく偶発的で複雑な事情によって、カタルーニャ語地域の中のアルゲロの存在に気づいた。当時のロマン主義文化の立役者たちは、アルゲロの発見を政治的要求の旗印とし、そうすることで、歴史主義・中世主義的な精神に則って今はなきアラゴン連合王国の栄光を取り戻そうとした。それはまた、カタルーニャでは文化・文学やフォーマルなコミュニケーション場面にほとんど使用されなくなっていたカタルーニャ語の、かつての栄光を回復することにも繋がっていた。アルゲロのカタルーニャ性は、古き栄光の象徴、そして将来への希望の象徴となったのである。

19世紀のカタルーニャ・ブルジョアジーは、スペインと経済面の交渉を行い、とりわけかれらに欠けていた政治権力を獲得するために、自分たちのアイデンティティを固めようと努めた。産業化の進展のなかでブルジョアジーと労働者階級が真っ向から対立した時代にあって、カタルーニャ庶民の支持を得ることはブルジョアジーの利益にかなっていた。ブルジョアジーを救い、庶民階級を解放する政治的カタルーニャ主義は、両者が共有するところとなった。そうしたなかで、カタルーニャ語地域としてのアルゲロの発見は、数十年にわたって文化関係の雑誌が好んで取り上げるほど、インパクトの大きな出来事であった。実際、当時のカタルーニャにおける非常に強い関心と期待とは裏腹に、アルゲロではまったく関心が巻き起こらなかった。カタルーニャ語地域としてのアルゲロは、自然発生的・無意識的な存在で、政治的な波動とは無縁なほとんど孤立した状態にあった。

状況は1887年に変化した。この年、多才なカタルーニャ文化推進者、

エドゥアルド・トダがスペイン政府によってアルゲロに派遣された。その目的は、カタルーニャ語地域としてのサルデーニャ島の過去にかかわる文献資料をあらゆる手段を動員して突き止め、複製し、買い取り、あるいは単純に獲得することであった（トダはきわめて好ましくないやり方で大量の資料を持ち去った）。それら資料は、栄光に満ちたカタルーニャの過去を再構築するために有用だった。もちろん、再構築するというのはロマン主義的な視点からの話であり、「栄光に満ちた」という捉え方も同様にロマン主義によるものであった。アルゲロは、中世カタルーニャ帝国とその島々を結ぶ有名なルート、すなわちバルセロナとバレンシアからバレアレス諸島を経て、サルデーニャ島、シチリア島、マルタ島、東地中海の島々へ向かい、中世後期にカタルーニャの君主に一部服属したギリシアにまで達するルートの中で、唯一生き残っている部分であった。

有能きわまりないエドゥアルド・トダによる外交的使命を負った仕事は——トダが入手した数千もの文書は、今日、カタルーニャ各所の文書館、マドリード、そしてスペイン国会文書館など、多方面に分散している——、当時のアルゲロのカタルーニャ語が辿ろうとしていた道を決定的に変えてしまうほどの文化的な含蓄に満ちていた。エドゥアルド・トダは、言語にきわめて強い関心をもつカタルーニャの文化運動、なかでもロマン主義運動の勢いのせいで民衆詩には敏感だった。トダが蒐集した膨大な量の口承文学の資料や地元に伝わる逸話としての性格をもつ詩は、書物となって、カタルーニャにおけるアルゲロ人気を高めるのに寄与した。

しかし、今度ばかりはアルゲロの人々も、記憶とアイデンティティの回復のための活動に無関心な態度で臨んだのではなかった。かれらはむしろ、エドゥアルド・トダの任務を手助けし、彼の理念に染まっていった。そして、このカタルーニャの外交官、トダがアルゲロに捧げた書物のうちの3点のタイトルに、当時ほんの片田舎にすぎなかった自分たちの町の名を見たとき、アルゲロの人々は、カタルーニャとの国際的な関係——それまでアルゲロの人々のイタリア性が疑われることはなかった——、文化的・歴史的な親近性や言語的な一体性にもとづく関係がもたらしうる利点に気づいたのである。

こうして、アルゲロで最初の文化再生運動が始まった。この運動では、若い知識人のグループが、大多数の人々——こうした事柄に携わるにはあまりに貧しすぎた——の実際の関心とは離れたところで、アルゲロ方言（ア

ルゲロのカタルーニャ語）を使って詩を書こうと努めた。しかし、専門知識をもたないかれらが残した文学的な業績は、多くの人々にとってさして関心を惹くものではなかったし（学問的にはきわめて興味深いものであったが)、文体としても、高邁な文学的メッセージを伝えられるほど十分に確立されてはいなかった。こうしたことから、平均年齢が20歳ほどのかれら自身、アルゲロ方言をバルセロナで使用されるカタルーニャ語の変異体（それはまだ変異体、標準語、規範語のいずれともとれないものだった。その当時、すなわち1917年以前のカタルーニャ語は、まだ統一されていなかったからである）に近づけることが必要だと気づいたのである。彼らの文学作品をみると、ローカルな言語現象の一方で、共通カタルーニャ文語の慣習的形態が併存している。それらの作品からは、アルゲロ方言の言語現象に関する的確な情報を引き出すことはできない。なぜならば、かれら自身告白しているように、かれらは自分たちの文体からアルゲロ的な言語現象を取り除いて「純化」することを望んだからである。また、だからといって洗練されたイメージを与えるわけでもない。教養語がしばしば不適切に吸収され、今日でもアルゲロ方言の研究者を戸惑わせるような混種語が生み出されたからである。

さらに興味深いのは、これらの若き知識人たちが文法書編纂の必要性を感じていたということである。しかもそれは、エリート主義的なかれらの運動が認知されていなかったアルゲロではなく、むしろカタルーニャで一目おかれることをめざしたものだった。かれらはカタルーニャでなら評価されると思ったし、実際にいく人かのアルゲロ出身者はそのとおりになった。しかし、少数の者だけが評価を受けたことは深刻な内部対立の種となり、言語に関する事柄が、特定の傾向、政治的立場、そして特定の人脈戦略の象徴と化していった。第１回カタルーニャ語会議（1906年）には、２人のアルゲロ出身者が招待された。会議が終わると、招かれなかった者たちはかれらの敵となった。その時から（おそらくはそれ以前からであるが、この点にはここではふれないことにする）現在まで、アルゲロの文化界の状況はきわめて厳しい。そして、その原因はおそらく現在も同じである。つまり、バルセロナではある種の傾向が持ち上げられ、ある種のスタンスが無視され、そしてある種の反応は手厳しく扱われるのである。

カタルーニャとアルゲロの間で頻繁な文化交流がなされたこの時代は、

カタルーニャ語で表現されたきわめて価値の高い書簡集を遺してくれたが、立て続けに起きた政治・軍事上の問題によって突然の終わりを告げることになる。第一次世界大戦の後につづくイタリアのファシズムとスペインのプリモ・デ・リベラ独裁（この時代には、国家ナショナリズムがカタルーニャとアルゲロの交流を容認しなかった)、スペイン内戦、その直後の第二次世界大戦といった出来事がそれである。カタルーニャとアルゲロは、再び別々の道を歩むようになった。スペインでは、カタルーニャの文化的潮流にかかわるものすべてが、そしてもっとも伝統的なものや民俗的なものでさえが検閲にかけられたばかりでなく、少なくとも庶民的なレベルでは、カタルーニャ語地域としてのアルゲロの存在が再び忘れ去られた(いずれにせよ、それを主張に掲げることはできなかっただろうが)。

これに対してアルゲロでは、イタリアにおける世界大戦の終結とともに、前世代よりもしっかりとした基礎をもつ（とはいえ現世代とは比べ物にならないが）若い世代の知識人たちがカタルーニャ語による学問の長い沈黙を破り、文学、言語、民俗にかかわる仕事に打ち込んだ。この業績は、亡命した文化人らと繋がりをもつごく少数の知識人の関心を惹いた。1960～1962年には、カタルーニャとアルゲロの関係が再開され、亡命下で定期的に開催されていた文芸コンクールは、ペラ・カタラ・イ・ロカの仲介のおかげで、アルゲロの2度目の文化再生運動へと結び付いた。それは、アルゲロのすべてのカタルーニャ人（いく人かの亡命者を含む）が参加して開いた文芸コンクールを通じて、メディアの反響をよぶ画期的な出来事となった（フランコ体制によって強いられた制約の中ではあるが)。このとき生まれたフォーマルな場や家庭的な繋がりにおける友情関係は、現在でもカタルーニャとアルゲロのある種の人々を結び付けている。

しかしながら、上にみたような忠誠に満ちた関係がもつ積極的な面にもかかわらず、20世紀初めに起きたことは再び繰り返されている。すなわち、アルゲロのさまざまな文化団体は極度に孤立し、ときに対抗する関係にあり、たいていは互いに無関心か、丁重に距離をおく態度をとっている。とはいえ、友好がそこにないわけではない。後述するように、アルゲロの知識人の相当部分が参画する共同プロジェクトも存在するからである。

しかし、ここでわれわれは、本講演の最初の論点のひとつに立ち戻らなければならない。私が述べた最初の文は、「日本語、あるいは大多数の言

語とは異なり、カタルーニャ語は均質性を特徴とする言語である」であった。さて、この決まり文句、いいふるされた表現、ステレオタイプは、数十年にわたって権威ある文献学者によって繰り返され、学校教育の手引書の中に定着しているが、アルゲロのカタルーニャ語を取り上げたとたんに妥当性を失う。すなわち、カタルーニャ語とアルゲロの言葉は、同一言語であると断言するための主要な条件のひとつを有するにもかかわらず（すなわち、これら2つの共同体が、さほどの教養層でなくとも、同一言語を話しているということを自然に意識しているという事実)、自動的に相互理解が得られないという意味で、言語と方言を区別するために通常参照されるもうひとつの条件は満たされていない。アルゲロの人々に特徴的な発話のリズム、固有の音韻、共通語に対する古語の存在、サルデーニャ語のさまざまな方言から入り込んだ語彙・語義にかかわるサルデーニャ的特徴、最近におけるイタリア語の影響、そして当然ながら、カタルーニャ語のさまざまな方言的変異体からは独立した変化の過程によって、カタルーニャ人とアルゲロの人々は、互いの言っていることを完全に、あるいは自然体で理解することはできない。アルゲロの言葉を難なく理解できるのは、イタリア語を知っていて、サルデーニャ語の音韻の心得がある（無意識的・受け身的にでも）カタルーニャ人である。また、アルゲロの人で共通カタルーニャ語を理解できるのは、アルゲロの諸団体がいつも開いている講座で共通カタルーニャ語を勉強したことのある人である。

アルゲロの諸団体の講座は、互いに独立し、しばしば対抗的な関係にあり、上位機関が支援を与えたり、主催者となることはほとんどない。そうした講座の急増は知識人・一般人の両方にあるジレンマをもたらしたが、それはもう少しで解決されようとしている。すなわち、アルゲロの言葉は、他の地域に固有のカタルーニャ語といかなる関係にあるのか。とりわけ、バルセロナに固有の変異体を立てるために、アルゲロの言葉を放棄しなければならないのか。そしてもしそうだとすればなぜなのか、といった問題である。他方、カタルーニャとアルゲロの現在の関係はきわめて希薄であり、アルゲロの人々はほとんどかれらの間だけでコミュニケーションを行っている。また、世代的な危機も存在する。カタルーニャ語を話しているのは、基本的に老人や社会の周縁的な位置にいる層であり、結婚期の若者で、かれらどうしでカタルーニャ語を使う者は少ない。必ずしも信用できるわけではないが、最近の統計は、家庭内でカタルーニャ語を使用して

いる子どもがわずか１％にすぎないことを示している。

こうした状況のなかで、アルゲロにおけるカタルーニャ語使用は、多くの場合、ボランティア的な行為あるいは文化的な闘争であり、政治的なスタンスを意味することもある。この政治的スタンスをめぐっては、1960年代以降、３つの考え方の支持者が対立している。すなわち、①アルゲロの言葉をローカルな領域で使用される言語、文芸の言葉と捉え、その特異性を大部分擁護するが、アルゲロの言葉がカタルーニャ語に属していることには疑念を差し挟まない独自路線派、②アルゲロの言葉を共通カタルーニャ語の規範構造により近づけようと働きかける純粋派、そして③折衷派の３つである。本講演の結論でみるように、現在、アルゲロの言葉のための戦いで優勢になっているのは、最後にあげた折衷派である。

ここで、カタルーニャ研究院という機関の存在にふれておかねばならない。カタルーニャ研究院は、スペイン政府から承認された規程にもとづいて、カタルーニャ語の規範に関する権限を行使している。アルゲロ方言が、その周縁的な性格や話者の少なさゆえに1980年代までしかるべき位置を与えられていなかったのは、理解できるところである。そうした穴を埋めるために（アルゲロ方言の語彙の相当部分は辞書に出ていなかったし、アルゲロ方言の形態的な現象も規範文法ではほとんど取り上げられていなかったため、アルゲロの人々は、自分たちがカタルーニャ語の変異体を話しているのではないと考えることもありえた）、カタルーニャ研究院は、1980年代にアルゲロの文化関係者らへの接近を試みた。しかし、働きかけは見事な失敗に終わった。それはひとつには研究院の家父長主義的な性格が災いした結果であったが、アルゲロの諸団体や個人の間にある従来からの敵対関係も原因の一部である。かれらの多くは、規範に関する権威者との対話において、自ら主役になろうとしたからである。カタルーニャ研究院は、この経験にたいへん困惑して貝のように口を閉ざし、カタルーニャ語のアルゲロ変異体を地元アルゲロのそれなりに誠意ある知識人の手に委ねることにした。

カタルーニャ研究院の沈黙、イタリア国家の無関心、アルゲロ市の怠慢といった事態は、1992年、「アルゲロ言語規範化グループ」とよばれる団体の自発的結成を促し、地元の言語研究者のほとんどがそこに集結した。このグループの企図は、慎ましいが画期的なものであり、かれらが得た成

果は、その後修正を受けながらカタルーニャ語回復の過程を正常な状態へと導きつつある。すなわち、カタルーニャ語の「標準口語」——基本的にラジオやテレビでの使用に供するためにカタルーニャ研究院が編み出したばかりのもの——にアルゲロ方言に固有の変異体を取り入れ、かかる「標準口語」にアルゲロ方言を位置づけるというのが、かれらの試みであった。もちろん、「標準口語」には柔軟性があり、カタルーニャ語の主要方言のもっとも純粋な変異体を受け入れられるようになっていたから、グループの戦略にも適っていた。こうした作業がおさめた成果は控えめで、即時的なものではなかった。1995年、カタルーニャ研究院は、なんら宣伝を行うことなく、グループの提案のかなりの部分、基本的に古語に関する部分を受け入れた。

もっとも、アルゲロ方言が「標準口語」の中で承認を受けるようになったとはいえ、そうした政策は、アルゲロ社会の庶民的な場に反映されるにはいたらなかった。また率直なところ、教養人の間でさえ、グループが行った作業の戦略的重要性が完全に理解されたわけではない。とはいえ、カタルーニャ研究院とアルゲロ社会の関係を取り戻す、という意味がそこにはあった。実際、数年後になると、カタルーニャ研究院とアルゲロ市は、それぞれの権限を互いに認め合う議定書に調印している（したがって、カタルーニャ語の変異体としてのアルゲロ方言について、研究院の規範にかかわる権威を自動的に認めた)。そこから、２つの大きなステップが必要になった。カタルーニャ語を初等教育に取り入れること、そしてそのために、アルゲロの児童とのコミュニケーションに適したカタルーニャ語のモデルを創り出すことであった。近年公表された統計値にもかかわらず、アルゲロの固有言語について児童が有する受動的能力は高い。

アルゲロやカタルーニャの諸機関、カタルーニャ研究院、アルゲロ市役所などと多方面の関係を有するルカ・スカラ氏は、暫定的な標準アルゲロ方言として、学校教育における指導基準となるにふさわしい「書き言葉の基準」を作成する任務を負った。そこで意図されていたのは、カタルーニャ語教育をもっとも方言に密着したレベルから始め、児童の学習の進度にしたがって、アルゲロ変異体（家庭内やインフォーマルな場面でそれを放棄する必要はない）の習得から一般的な「標準語」の精通へと児童を導くことであった。

2002年、カタルーニャ研究院は前述の「基準」を承認し、翌年それを

公刊した。他方アルゲロ市は、カタルーニャ語関係の諸団体との協力によって、アルゲロのすべての学校で少なくとも週1時間、しっかりと体系化されたアルゲロ変異体としてカタルーニャ語を教えることを目的とするジュアン・パロンバ計画への資金提供を行っている。それは、アルゲロ方言が直面している困難な状況への打開策にはならないかもしれないが、少なくとも、これ以上放置できないアルゲロの人々の象徴として、また将来に向けた希望としての意味をもっている。

以上のような運動のすべてが何かの役に立つのかどうか、聴衆の中には疑問に思われる方もいるであろう（これは他の講演の場でも起きうることであり、とくに単一言語社会にあってはそうである）。答えは、当然ながらノーである。1％ばかりの数字、敵対関係や恒常的な障害、そしてこのテーマに無関心な人がほとんどの4万人のアルゲロ社会について語るかぎりにおいて、まったく何の役にも立たない。しかし、まさにこの理由のために、何の役にも立たないがゆえに、この努力に意味を付与する価値がある。なぜならば、この努力は――しばしば抑圧されている言語にアイデンティティの基礎をおく者にとっては自発的な努力である――、そうしたアイデンティティ、分断ではなく結合を志向するアイデンティティを強化するものだからである。双子がパラノイアに陥らないためには、良好な自意識をもたなければならない。2つの国家が交渉するには、互いのアイデンティティを認めなければならない。そして2つの文化は、自らの利益のために一方の文化が他方を消滅せしめるといったことを望まないのなら、自らの自立に対する認識を深める必要がある。

人がまったく存在しない世界では、何事も役に立たない。しかし、個人が存在するのならば、その人のアイデンティティはただちに意味を獲得する。それは、言語を通じて表現されるアイデンティティである。その言語が国家をもつか否かにかかわらず、また将来のあるなしにかかわらず。

私は、聴衆の方々に私の意見を共有してもらおうと意図しているのではない。しかし、そうした意見のために働いている人が世の中にいることを認め、記憶に留めておいてほしい。もしそうでないならば、みなさんは私の講演を聴かなかっただろうし、私がここにいることもなかっただろう。ここにいて、みなさんに語りかけ、耳を傾けてもらえたことに感謝の意を表して、この講演を終えることにしたい。

訳者あとがき

本稿のもととなっているのは、カリアリ大学（イタリア）言語・外国文学部研究教授のジュアン・アルマンゲ・イ・エレロ（Joan Armangué i Herrero）氏が2005年10月11日、愛知県立大学でスペイン学科学生・教員を主な対象としてカスティーリャ語（スペイン語）で行った学術講演である。カタルーニャ（スペイン北東部）出身のアルマンゲ氏は、バルセロナ大学でカタルーニャ文学の研究により博士号を取得、1980年代半ばからイタリア・サルデーニャ島の中心都市カリアリに居を定めて、カリアリ大学で研究の傍ら教鞭を取っておられる。民衆文学・口承文学の研究、児童向け作品の著作など、多方面にわたる氏の活動の中でも、カタルーニャ語・カタルーニャ文学の研究は中核的な位置を占め、とくに地中海世界における重層的な文化形成について、言語文化の視点からすぐれた業績を発表しておられる。中世にピサやジェノヴァからの進出を受け、カタルーニャの支配下に長くおかれたサルデーニャは、そうした文化の積み重なりと鬩ぎ合いについて論じるには格好の場である。サルデーニャ語の上にイタリア語が被さるダイグロシア的状況におかれたサルデーニャにあって、北西部の都市アルゲロがカタルーニャ語の遺産を今日まで受け継いでいる特異な存在であるということは、氏が講演の中で詳しく述べているとおりである。

スペインを中心とする4つの国に話者を有するカタルーニャ語は、ヨーロッパの諸言語の中でけっして小さな存在ではない。使用地域の人口は、カタルーニャ語をカスティーリャ語とならぶ公用語としているスペインの3自治州のみでも1千万人を超え、実際にカタルーニャ語を話している人口をみても、EUの公用語の中では、たとえばデンマーク語やフィンランド語よりは多いとされる。しかし、国家をもたない言語（アンドラ公国の公用語であるという点を別にすれば)、法制度的にも社会言語的にも国家語の影響下に包み込まれているカタルーニャ語のような言語が、国家語の構造的な圧力とそれに対する反発力の微妙な均衡の上に存立していることも、また事実である。そうした状況のなかで、アルマンゲ氏が光を当てているのは、カタルーニャ語の存続の条件がとりわけ厳しいと考えられるアルゲロの場合である。カタルーニャから地理的に大きく隔たったこの町で、カタルーニャ語話者としてのアイデンティティを発見し、将来に伝えようとする人々の葛藤を、氏は、カタルーニャ語の権威の中心たるカタルーニャ

との微妙な関係、地元の推進者相互の主導権争いといった側面を交えながらみごとに描き出している。言語によって人々のアイデンティティが表現されることに言語の存在意義を見出すアルマンゲ氏の論は、グローバル化が進む現代世界における文化の多様性の意味について考えるうえでも、きわめて示唆に富むものであろう。

翻訳にあたっては、アルマンゲ氏自身が用意された講演原稿を使用し、まず本学学術情報センター主任で、外国語学部スペイン学科および大学院国際文化研究科博士前期課程を修了した笹野益生氏が下訳を作成した。その後、竹中が訳稿を全体にわたって点検し、必要な修正を加えて完成稿とした。翻訳にもとより完璧などありえないが、もっとも迷ったのはアルゲロの言葉を意味する alguerés の訳語であった。アルマンゲ氏の論では、アルゲロの言葉とカタルーニャ語の関係やカタルーニャ語の中での位置づけが問題とされているので、alguerés の意味合いは必ずしも一定ではない。結果的に、文脈に応じて「アルゲロ方言」「アルゲロの言葉」などと訳し分けたが、この点については、言語学にかかわる概念語の翻訳などの問題と併せて読者の批判を仰ぐこととしたい。

2007年10月

訳者を代表して　　竹中克行